

4型進行胃癌とは、いわゆる“スキルス胃癌”と呼ばれるタイプの胃がんのことです。無症状の段階から腹膜播種を伴っていることが少なくなく、根治的な外科手術治療の対象とならずに化学療法での治療が行われることが多いです。また、腹膜播種がなかった場合には外科手術が行われますが、腹膜播種の形で再発することが少なくなく、以前から難治な胃がんとして知られています。

腹膜播種がなかった場合の現在の標準治療は、まず手術を行い、その後に再発予防を目的に抗がん剤治療を行います（術後補助化学療法といいます）。術後補助化学療法の現在の標準治療は全身化学療法です。腹膜播種がなかった場合に、腹腔洗浄細胞診が陽性（がんの組織としてはないものの細胞レベルでは腹膜にがん細胞が認められること）であることもあり、この場合には腹膜再発するリスクが高いために手術前に全身化学療法を行い、効いた段階で手術を行うことが多いです。

腹膜播種は、お腹の中の腹膜の表面に多数存在しますので、抗がん剤をお腹の中に直接入れれば理論的にはもっとも届きやすいと考えられます。実際に、抗がん剤をお腹の中に直接入れることで多くの患者さんで腹膜播種を強力に抑えることを、これまでの臨床研究で経験してきました。現在の標準的な全身化学療法に腹腔内化学療法を併用することで、腹膜再発を抑えて治癒が得られる患者さんが多くなるかどうか、検証することがこの研究の目的です。特に腹膜再発が高率なスキルス胃癌に限定した治験となります。

詳細は下記もご参照頂ければ幸いです。

<http://plaza.umin.ac.jp/~phoenix2/scirrhous/>

お問い合わせ先 03-3293-1711 消化器外科外来（教授 山下裕玄）

